ナナリーの日常

池田 南

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ナナリーの日常

【Ｎコード】
Ｎ３９０１Ｑ

【作者名】
池田　南

【あらすじ】
世界を平和に治めるナナリーと、誰も死ぬことのなかったギアスキャラクターの、なんとなくまったりとしたお話しです。

ほのぼのナナリー（前書き）

過去に発表した作品だったのですが、あまりにも誤字脱字が多かったので、いろいろと変えさせていただきました。

私、池田南の処女作となっておりますので、過去に呼んでくれた方々も、そうでない方々も、いろいろと指導していただけるとありがたいです。

ほのぼのナナリー

―朝目覚めると、天井の高い部屋の窓から、心地のいい風が吹いてくる。

私はごろりと寝返りをして、隣に置いてある、年相応にジャラジャラとストラップをつけたケータイを覗き込む。

約６時間前に定時にお気に入りの音楽を鳴らすという使命を背負ったそのケータイは、あと１５分で今日の初めての仕事を迎えようとしている。

私はこのまま二度寝をし、彼の朝一番の仕事をさせてあげようとも思ったが、二度寝をしたら、まず間違いなくケータイではなく、兄が私を起こしに来るだろうと思い、目をゴシゴシ擦りながらケータイの仕事を奪い、一階に降りていく。

「おはよう～」

私は最近リハビリでやっと動き始めた足で下に降り、いつも音楽家みたいにクルクルの髪をした、元ブルタニア国王シャルル皇帝こと、私の自慢のお父様に挨拶をする。

「おーはよーぅ、ナナリぃー…」

新聞片手にコーヒーをのみながら、お父様が私の挨拶に答える。

（それにしても、お父様の声は、昔テレビでみた「素敵な球を7つ集める」アニメに出てきた気持ちの悪い人造人間に似ている…

もちろん、家のお父様は人間ですよ？）

私はすぐさま朝のご飯とお弁当の支度に取りかかる。

ちなみに、お父様は『元』皇帝…

でも今は、なぜか売れっ子同人作家に…

なんで皇帝から、こんなおっきいお友達の夢を叶える人になってしまったかというと、

『Cの世界』でお母様と再開した際、お母様がずっとアーニャにパラサイトしていたせいで、アーニャの腐女子ウィルスに感染してしまった…

そしてそのウィルスはお父様にも猛威を振るい、今や俗事（政治）そっちのけで、アーニャ（お母様）と腐女子向けの同人作家になってしまいました…

まぁ、とにかく今はお父様と、昨日籍を入れたばかりのスザクとの暮らしに満足しています♪

さてさて、私たちは朝ご飯を食べ終わり、お父様は仕事先へ、スザクは学校へ行く準備をしています。

わたしもスザクと一緒に学校へ行く準備を…しているわけではなく、せっせと『皇帝なりきりセット』に身を包む。

今日は朝から晩まで兄（ゼロは現代の英雄なんですよ♪）とお仕事しなければならないのです。

全く、皇帝は大変だね。

さて、そろそろお兄様が中華連邦から蜃気楼で迎えに来てくれる時間だ♪

そう思いながら準備をしていると、後ろから私の旦那様が声をかけてきました。

「ナナリー」

「なぁに？スザク」

まだリボンを付けていない私がスザクに向かい振り返る。

「ナナリー、君の仕事がこの国…世界のために大切なのはわかるけど…絶対に無理はしないでね？その…あの…君の身体は、もうひとりのものじゃないんだからね！？」

…朝からこの子は恥ずかしいことを…

ちなみに、私のお腹には別に誰もいない。

勘違いを起こしたのは籍を入れると決めた一週間前でした

たまたまその日は身体の調子が悪く、せっかくスザクが作ってくれたタコライスを吐いてしまった。

…タイミングはバッチシつわり的な感じで…

むせてなにも説明出来ず、潤んだ瞳をスザクに見せたのが間違いだったようで、ものの見事に誤解してしまった…

でもまぁ、嫌がる私に中出しするお猿さんのほうがいけないと思うのと、単純に私を思う優しさに幸せを感じていたかったので、あえてここでは話に乗ることにしました♪

「ありがとう、スザク。

でも、今日はC，C，もお兄様もいるから平気だよ？

スザクこそ、この前みたいにあまりにも私が心配になったからって、カレンさんぶったおしてグレンでお出迎え、ってのは二度としないでよね？」

「大丈夫、キミにストレスを与えたりしないから♪それより今日の外交はどこだっけ？」

「ん？今日は…北〇鮮」

その瞬間、なぜか彼のお兄様がかけたギアスが発動したかに見えた…お願い、気のせいでいて！！

「…何時に現地入り？」

「え…えと…あと3時間後くらいかな？」
スザクは「そう」

と言って、玄関の方に足を進める

なんか途中、「ランスロットは間に合わない」

とか「グレンなら…」
とか聞こえたが、あえて無視する。

すると突然、スザクはどこかに電話をした。

「……もしもし、ラクシャータさん？スザクですが…」

「…フレイヤってまだありましたっけ？」

…気がつくと私は、夫の後頭部に目掛け、小夜子さんのクナイを投げつけていた…

「…それでぇ？ムコ殿はぁ…この平和な世の中でぇ、何のためにぃ、フレイヤを使おうとぉ？」

私は説教をお父様に任せ、お兄様の蜃気楼で空港まで急いだ。
途中、雨に濡れた子犬のようにふるえているスザクを見て、笑いを隠すようにマフラーを巻いて。

「ナナリー様、只今シュナイゼルが到着しました。」

今、公衆の面前で現世界の頂点に君臨するもの、計算された演技の上で世界の英雄になったものが、成田空港に到着する。

仮面を外せばただの高校生の兄と、中学生の妹に戻る間柄といえど、この先は外見もとより、心にも仮面をかぶらなくてはならないことを、ふたりは充分すぎるほど理解（もしくは痛感）していた。

「おはようございます、シュナイゼルお兄様。

今日も一日よろしくお願い致します。」

バッチリ挨拶が決まった！！

多分お兄様も仮面の下で成長した私を見て、嬉しくて涙を流してるに違いない。

だってさっきからめちゃくちゃ鼻をすすってるんだものｗｗｗ

そんなことを考えながら、扇（現日本国総理大臣）と今日の日程を、軽く飛行機内でチェックする。

（余談だけど、私とゼロの素性は、関係者の中でも知っている人は少ない。

黒の騎士団と、ブルタニアの身内だけ。

さらに余談だけど、界ではゼロは日本人だという認識になっている。

英雄は一度は迫害された国であらなくてはならないらしい…

でも私はこの設定をどうしても好きになれない…

だって、周りはお兄様を『悲劇の』英雄としか思ってくれてないもん…）

扇を茶化しに玉木が（どうやって入ってきたの！？）くると同時に、飛行機内にサイレンが鳴り響く！！

「玉木！！お前、なにをしたんだ！！」

「はぁ！？俺はなにもしてねぇよ！！あんたの嫁さんがまた潜入してんじゃねえの？」

「バカ野郎！！ヴィレッタが潜入でバレる訳ないだろ！！あいつならちゃんと気付かれずにお前の首をはねているはずだ！！」

ん？否定する場所が違う気が…

っていうかいつから玉木さんは抹殺対象に…？

「それにヴィレッタは「おい！！外をみろ！！」」

突然千葉お姉さん（美人でかっこいいんだよ♪）が叫んだ。

私たちはその指示通りに外を見ると、なぜかギャラハット、ロロ専用ヴィンセント、紅蓮聖典八極式がものすごいスピードで飛んできた！！と同時に、飛行機内に放送がかかる

『ナナリー！？義弟から事情は聞きました！！

これから北〇鮮を義弟と父さんで潰しに行きます！！』

…え！？ギャラハットの中ってお父様！？

『ナナリー、もう安心だよ！！あんなナナリーにえっちなことをする総書記なんて、フレイヤがなくても瞬殺さ♪』

殺されては困るし、私、お隣の国の総書記さんには初めてあうのですが…

『それに…君には元気な僕の子供を産んで欲しいから、これからはなんかヤバメな国に行くときは護衛（暗殺）に来るから！！』

『ムコ殿ぉ～、いうではないかぁ～。

さすがぁ、我が娘が選んだ男よぉ～』

お父様の発言はともかく、スザクがつい言ってしまったことに、機内は数秒間、氷河期に突入した。

「ナナリー…お前、もしかして…」

千葉さん、お願い！！何もいわないで！！

「ナナリーが…妊娠？」お兄様！！

その瞬間、機内は一瞬にして華やかなムードに包まれた。

おそらく事情を知っているC，C，と、なぜかお兄様以外だけど…

「おめでとう！！ナナリー！！」

周りから祝福され、誰が何を言ってるか分からない…

（ただ、先ほどからしきりに私のお腹をドスドスと殴るマオさんは、後でお兄様に頼んでギアスをかけておく必要があるな…どうやっていじめようか…）

みんな、
そんなに浮かれてていいのかな？

外には国をぶっ潰そうとしている輩が三人も…あ、もう行っちゃった…速いなぁ…

「シュナイゼル」

みんなが喜んでいる中、なぜかお兄様はシュナイゼルお兄様を呼んだ「カチカチ持ってきて」

「かしこまりました」

未だにギアスが解けていないシュナイゼルお兄様に、なにやらお兄様が注文していたのを、私は見逃さなかった

「あの…ゼロ？何をしようと？」

私を包む歓声が、マオを袋叩きにする騒ぎに変わったのを利用し、私はお兄様の元に行く。

カチカチカチカチカチカチカチカチカチカチカチカチカチカチカチ
カチカチカチカチカチカチカチカチカチカチカチカチカチカチカチ…

「決まってるじゃないか♪」

カチカチカチカチ…

「俺の愛しのナナリーを孕ましたあのイエローモンチーを、これで…」

カチカチカチカチカチカチカチカチ…

お兄様が仕切りに連打しているカチカチを見ると、それは…

最終決戦で使ったフレイヤ投下ボタンだった！！

直後、飛行機の目の前にて爆発が…失敗した何弾かはなぜかジェレミアさん邸に被弾したらしい…

「お掃除完了♪」

可愛くそうつぶやいたお兄様の瞳は、なぜかこの世で最も美しいと思えるほど、すっきりと澄んだ瞳になっていた。

とりあえずお隣の国の脅威を潰したおかげで、外交はなんとか成功した。

ちなみに、スザクが滅された後に、しっかり私が妊娠してないことをみんなに伝えた。

終始C，C，が匂いの強いピザを黙々ととなりで食べており、そのにおいで気持ち悪くなるたびに『つわり!?』と騒がれながらも、みんな納得してくれたみたいだった。

（後日、ボロボロになりながらも、なぜか三人ととばっちりを受けたジェレミアさんは生還した…

お兄様に、これでもかというほど高価なお土産を買って…）

塩の味

今日、僕たちは青空の元、草の絨毯と、太陽の光に包まれ、ルルーシュ特性のお弁当を囲んで休日を楽しんでおります。

「お兄様、やっぱり日本の料理は美味しいですね♪
お兄様はもう和食ですら完璧に作れるのですね♪
うらやましいです。」

「ああ、ナナリーが喜んでくれて何よりだ。
今度ナナリーにも和食料理を伝授してあげるよ。」

みんな、幸せそうにたべてるなぁ…

「ねえルルーシュ、兄弟の会話に割り込むのは悪いと思うけど…」

「なんだスザク？」

「なんで僕だけスーパーカップのカップ麺なんだい？」
「黙れ受胎魔、お前なんてそれで野菜食った気にでもなってろ。
っていうか今後ナナリーの体内に貴様の子種を放つたびにジノ呼んで貴様の後ろを掘るから、夜露死苦！！」

ジノの新たな性癖を知ってしまった一言だった！！

「お兄様…死語にも程がありますよ？
あと、私とスザクは夫婦なんですから、そんな規制はしないでください」

「ルルーシュだって従姉妹の顔、早くみたいだろ？」

「黙れ虫けら、フレイヤるぞ」

―こんにちは、裏切りの騎手こと、スザクです。

前回のナナリー受胎疑惑によりルルーシュに殺されかけてから1ヶ月後、僕らは相模湖ピクニックランドにいます。今年に入って、奇跡的に3人全員が仕事&学校がオフだったので、前々からみんなで遠出をしたいというナナリーの意見により、東京の新宿から相模湖ピクニックランドに光臨致しました。

しかし、困ったことに我が義兄のルルーシュは、この前の受胎事件をまだ許してくださらず、ナナリーとルルーシュはバスで行ったのに対し、僕は明らかに身体に（意図的に）マッチしない、少し錆び付いたチャリをルルーシュから笑顔で渡されまして、なにも否定することが出来ずに、サビレたチャリで必死になってバスを追っかけたおかげで、到着した頃には、ルルーシュの「生きろ！！」のギアスが発動気味でした。

ちなみに、ナナリーは現ブリタニア皇帝なので、こんなとこで顔がバレるといけないからと、佐代子さんが特殊メイクをしてくれたのだけど…

「どうみてもダルシム…」

「スザクさん、なにか言いました？」

「な、なんでもないよナナリー。

それより、食べ終わったらどうしようか？」

「そうですね〜…」
ダルシムが可愛く首を傾げる

（ルルーシュ、ナナリーはあんなメイクで満足なのか！？）

（いや…本人はまだメイクをみてないんだ…
バスの中でもずっと寝てたし…
昨日あまり寝てないみたいなんだが…貴様、寝かせないようなことでもしたのか？）

昨日となりでやたらともぞもぞ動いてたのは、今日が楽しみで寝付けなかったんだね…
小学生か！！

（いや…僕はなにもしてないけど…多分今日が楽しみだったんだろうね…）

（…とにかく、湖系なとこはまずい…反射して自分の顔をみる可能性がある…
こんな破壊力のあるメイクだ。ナナリーだってショックで湖に落ちる可能性がある。
あ、あと、佐代子さん的にはあの顔は研ナオコをモチーフとしたらしいぞ）

せめて年が近い人をモチーフにしてください

「お兄様、スザク、行きたい場所が決まりました！！」

「相模湖でボートに乗りましょう！！」

可愛い可愛いダルシムよ…君は自らの十字架を背負って火炙りの刑にでも処されるおつもりか？
（…スザク…）
（なに、ルルーシュ）
（あとは…あとは任せた！！）

「はぁ！？」

「ジャスティスコスチューム、ゼロ！！ＨＥＮＳＨＩＮ！！」

その瞬間、なぜか周りが光に包まれ、次の瞬間、僕らの目の前に正義のヒーロー、ゼロが現れた！！

「キャー！！ゼロよー！！」
「すげー！！本物かよ！？」

周りから黄色い声援があふれる…

「お兄様…なぜ…」

「ダルっ…ナナリー、こっちに！！」

僕はダルシムの手をとり、林に逃げ込んだ

「スザク、なぜお兄様はいきなりゼロになったの？」

「いや…なんか…ルルーシュがね、夫婦水入らずで林の中で従姉妹でも作れって…」

適当に話を誤魔化すが、そう言った瞬間、ダルシムは天女のように美しい（はず）微笑みを見せた

「うれしい！！やっとお兄様は私たちに子作りの権利をくれたんですね！？
じゃあスザク、一刻も早く私に種を…」

ダルシムがいそいそと服を脱ぎはじめる…メイクは取らずに

待ってくれダルシム、きみはそんなキャラじゃないだろう？
外なんだから、もっと恥ずかしくしなさいよ…そんな鼻息荒くして…

とりあえず服よりそのメイクをとってもらいたいんだけど…
でも多分、素に「Ｙｏｕ！！メイクとっちゃいなｙｏ！！」
なんて言っても、佐代子さんがやってくれたからとかなんか言っちゃって、きっと取らないだろう…かといってここに鏡はないし…

僕はダルシムを抱くほど変態ではない…

よし！ナナリー自身で恥ずかしいメイクを付けてると自覚してもらおう！！

「スザク？どうしたのです？」
上半身裸の、ちょっと発育の悪い胸をぶら下げたダルシムが、心配そうに僕を覗き込む…やるなら今しかない…

許せナナリー、そして悔い改めよ！！

「よ…」
「よ？」

「ヨーガファイアー～」

ぺちんと胸にデコピンをして、僕はマンドラを唱えた

さあ…気づくがいい…我が妻よ…

「す…」

我が妻は、顔を真っ赤にしてなにかを言いたそうにしている…
わかってるよ、すぐにメイクを取ります愛しのスザクさま～とでも言うのだろ？

「スザクのバカ～！！
なんで胸をはじくのよ！！

そんなに小さいのはいやなの！？

どうせ私の胸は未発達よ！！
もう二度と一緒にねてやるもんですか！！」

おぅ！？なぜ気づいてくれぬのだ！！
っていうか君と寝られなかったら、僕は誰と寝ればいいんだ！！

「まっ待ってくれナナリー！！これは…そう、日本のおまじないなんだよ、外で事をおっぱじめるときの！！」

「…ふぇ？」
ダルシムが泣き顔で僕のとっさの言い訳に耳を傾ける

「あの…ダルシムの技のように熱い交わりを致しましょうって意味なんだよ…マジで…」

「…ほんとに？」

僕はもう止まることが出来ず、「マジだー！！」

と叫びながらダルシムを押し倒し、激しく抱いたのだった…

「ふう…」

交わいが終わり、顔の火照ったナナリーの服を着せてあげていると、突然上から声が聞こえた。

「スザクさま、ナナリーさま、もうよろしいでしょうか？」

「ぅえっ！！さっ佐代子さん！？ってなぜハンディカムを…」

「ナナリーさまの命令ですから。
スザクが本当に私を愛してるか確かめたいとおっしゃっておりましたので、

失礼とは思いましたが、チャリのところから録画しております」

「ずいぶん長く録画してるね…。
じゃあ、このメイクも？」

「はい、ナナリーさまの命令です。」

僕は隣ですやすやと眠るナナリーを見た

今日は特に貪るように僕の身体を求めてきたけど、そんな下らないことをおもってたんだ…

僕は笑いながら、かつ真剣に、語りかけるようにつぶやいた。

「ナナリー、僕は君の顔に惚れたわけでも、身体目当てという訳でもないんだ。

ただ、一緒にいたいと、ただそれだけのギアスを君にかけたいんだ…

僕には魔王の力なんてないし、世界の救世主にもなれない。

でも、このギアスだけは絶対の自信があるんだ。

だから…」

僕は、佐代子さんがビデオを撮ってる前で、ナナリーの唇と、2人の婚約指輪にそっと、唇をおとした。

後日、なぜか僕とナナリーのあのときの記録を、ルルーシュがポップコーンを貪りながらホームシアターで見ており、僕とナナリーも一緒にみせられた。

ナナリーは終始恥ずかしそうにして、途中トイレに行くと行って逃げてしまったが、僕はずっとルルーシュのなんかよくわからない執念で縛られているような気がして、立つにたてなかった。

「…スザク、ポップコーン…」

「あ…ありがと…」

ぽりぽりぽり…

「…スザク」

「はっはい！！」

「…ナナリーは…俺の宝なんだ。
だから、いくらお前でも、ナナリーの心を持って行くことだけは、
許したくなかった。」

「…ルルーシュ…」
「でもナナリーは、俺よりお前を選んだ。
スザク、お前には、俺のナナリーへの思いも受け継いでほしい…」

「それは、ギアス？」

「魔王の願いではない…これは、お前の義兄としての願いだ…」

「…わかった。
義弟として、ナナリーは責任を持って、幸せにする。

でも、僕も義弟として、義兄さんに願いをいいます。」

「義兄さんも幸せになってください。

ナナリーは僕がこの先の人生を共に歩んでいきます。
だから…もうカレンを待たせないであげてください。」

ルルーシュは、驚いたのか目を見開いたが、すぐに元にもどり、僕
に心の内を伝えた

「…俺は、もう自分の幸せを願ってもいいのだろうか…
たしかに、カレンにはいつも悪いと思っているし、俺だって一緒になりたい…
でもゼロを…仮面を脱ぎ捨ててもいいのだろうか…」
たしかに、『ゼロ』の効力はナナリー以上にある
ナナリーの政治の未熟さを考えなかったとしても、ゼロほど分かりやすい象徴はこの先あらわれないだろう…
だからこそ僕は…
「ゼロの仮面は、僕が受け継ぎます。
僕には世界を変える力はないけど、ナナリーを守りたい思い、君にかけられた「生きろ」というギアス…ふたつも君から頂いた…。
これほど最強なナイトはいないと思うんだけど?」
冗談混じりに、しかし本気で、現在のゼロを築き上げた本人に引退を求めた。
「ああ、そうだな…お前こそ、最強のナイトだよ
だが、この仮面は重いぞ?
この仮面があるかぎり、お前はスザク・ヴィ・ブリタニアではなくなる
それでも、やり続ける勇気はあるのか?」

「…僕には最強のクイーンもついてます」

僕はこの日、ゼロの仮面を受け継いだ。

ルルーシュの想いと共に…

そして、この日ルルーシュからもらったポップコーンは、塩味がよくきいていたと、僕は思った。

ナナリー、大好きだよ

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3901q/

ナナリーの日常

2011年1月28日05時46分発行